

どもが三人腰をかけて居て、一人の尼さんが匙で何か盛つては食べさせて居る。左の子はもう食て終つて満足の顔をして居る。中の子は今しも匙を出された處で、小さい口をあけて、丁度母鳥を迎へた巢の中の仔鳥の様な口つきをして居る。一番右の子は、自分の番を待ち兼ねるやうに自分も譲らずく口をあけて居る。春の日か秋の日か、かいで居る尼さんの背を照して、穏やかな平和が晝一面に充ちて居る。

私は其の日歸つて直ぐ此の晝をとり出して見た。あの時の話の様子から見ると、あの尼さんは三人の孤兒をそだて、居るのではあるまいか。若い尼さんと三人の孤兒。私は今でもあの尼さんの處へ此の晝を持って行つて上げて來たい氣がする。

○お父さんの成功

十歳ばかりの男の子、お父さんに手をひかれて公園を散歩して居たが、何か前の方に面白いもので



もあつたとみえて、つか／＼と三四間さきへ獨りで進んだ。するとお父さんは笑ひながらつと身をかかわして、道の傍の櫻の木の下へかくれて仕舞つた。子供は氣がついて後をふりかへつて見ると、お父さんが居ない。大事なお父さんが居ない。可愛らしい眉のあたりに次第に不安の雲が深くなつて、あちこちと見まはすけれどお父さんが居ない。櫻の木の後ろではお父さんが可笑しさをこらへてコツ／＼と樹の幹をたいて聞かせるけれどまだ分らない。子供はちよ／＼と驅け出しては探すけれど見つからない。不安の雲はそろ／＼雨になりさうな恐れがある。こんどはお父さんの方でたまたまなくなつたと見えて、持つて居たステッキの先きへ山高帽子をのせて、櫻の樹の横へぬつと出した。

これは上野の博物館の附近で見た快い一幕であるが、發見して喜ぶ子供と、發見されて喜ぶお父さんと、互に快く笑ひながら、前よりも堅く手

を握つて、暖い春の日の下を静かにゆく姿を見て、私は一種の長閑な嬉しい威がした。そして嘗てある處で、一人の子守娘が、之れと全く同じ筋の狂言を演じて、發見させ方の適當な加減を誤つた爲に、とう／＼四歳ばかりのお嬢さんを泣き出させて仕舞つた光景を思ひ出して、その一寸した心ゆきの足りない處から起つた悲劇に對して、此の快い嬉しい喜劇を「お父さんの成功」と題して見た。

### ○子供ずきの博士

夏の汽車に疲れきつて、若いお父さんも眠りこんで居る。子どもは獨で窓の外など見て居たが、之れも倦きて腰かけの上へ横になつて眠つて仕舞つた。丁度隣の紳士の革靴の上へ小さい足をのせて、頭は下になつて居る。紳士は笑つて見て居たが、讀みかけの新聞を幾枚も折り重ねて、丁度子供用の枕位の高さにして、その子の頭の下へそつと

入れてやつた。子どもは愈々いゝ心持になつて眠込んだ。その小さい足をだん／＼に踏みのぼして無遠慮に紳士の顔の近くへやる。その革靴へ右肘をつけて「エンシエント グリース」( )を讀んで居らるゝ紳士の眼鏡へ、そのよこれたきたない足の裏が、汽車の動搖につれて、將に觸れやうとさへする。紳士はいやな顔もしないで、時々その子の寝顔を見ればほゝ笑みながら、鉛筆を持つては熱心に本へ書き入れをして居られる。

私は丁度そのま向ふに居て、ロッキーマンの「子供達の心」を讀みかけて居たが、この紳士が誰れといふことも知らずに無遠慮に汚い足を鼻の前につきつけて居る子供と、それを平氣で寧ろ愉快そうに讀書して居らるゝ此の紳士との對照が面白くて沼津から幾驛の間、とう／＼私にロッキーマンを讀ませなかつた。

その紳士といふは博士號二つ有たるゝ子供ずきの方である。